

# 第48号 華山会報

令和4年4月11日

公益財団法人華山会

## 手書き文字 今むかし

出光美術館・上席学芸員 笠嶋忠幸



中国・清時代末期、朱和羹しよわかこうという人が著した書法の評論『臨池心解』第三則に、十八世紀の書家・鄧石如とうせきじよの教えが紹介されている。「字画の疎なる処は、以て馬を走らすべく、密なる処は風をも透さしめず。此れ間架の法と悟るべし」と。つまり、書表現の上で、字画の疎らな部分は、馬が走れるくらいに広く開けること、逆に密になる部分は、風も通さないほどに狭くして書くことが大切なのだと言っている。さらに筆墨で文字を書く時は、つねに書線と余白とのバランスに配慮し、強

弱の妙趣が備わるように心掛けて書けば、自ずと書字には「奇趣」（素晴らしい趣）ができるものだという。筆墨による手書きの基礎的な「コツ」は、こうした中国書法論の中で繰り返し説かれてきた。そしてこれらが江戸期に日本へと請来されて以降、一気に教えは広まり、東西を問わず、いわゆる「唐様」の書家・文人たちが、各地で中国流の教えを「正統派の流儀」とし、積極的に喧伝している。他方、平安期の宮廷で有力貴族たちが主導し育み、伝承された日本の書道理論もある。空海直伝として継承した流儀はのちに分派化し、文化交流の場へ溶け込んでいった。そもそも国内で日常使われる言語表記は、漢字かな交じりである。この条件下では「唐様」書法の影響は受けにくいこともあり、江戸期初頭には、文化芸術に親しんだ貴族や民間の有力者が新風を披露すると、たちまち庶民にまで伝播し浸透していった。まさに江戸期における日本書道の歴史観は「二刀流」の様相でファクション化していたのである。

では、今はどうか。まず小・中学校の書写教育（国語科領域）では、まさに「二刀流」を継承した様相だ。しかし、手書き文字の役割や機能を理解するのではなく、きれいに整えて書くための「コツ」の学び舎となっている。高等学校の場合「書道」といい、「芸術科」に属することもあって多様な美意識に触れ、それらを味わい探究することが指導指針とされている。これらの間には、手書き文字の形（字形）と表現をめぐる課題があつて、二重の基準が併存している点で難解だ。もつとも今の世の中、これだけ便利な機器が普及すると、手書きする機会は激減している。それでも未来に向かつて手書き文化が消えて無くなることはあるまい。なぜなら、人は感じたこと考えたことを記録し伝えたいと願うからだ。情感の冷めぬ内に、書き留めておきたい欲求は、誰しも持っている。そして、その都度の気持ちの温度は、手書きの文字の形や表情でしか伝わらないことを知っている。手書きには、書いたその人にしか分からない感度の世界が備わっていて、受け手も、その点に臨場感を得て、人を偲ぶのだろう。多様かつ個人的な手書きの表情は、どんな歴史的、普遍的な理論をもってしても解明できない魅力をもっていることを大事にしたい。

『全樂堂記伝』(七)

— 華山伝記の根底テキスト —  
 研究會員 別所興一

蚕社の獄の背景

前号で紹介したように、江戸巢鴨の三宅友信(田原老公)邸には、幕藩体制の行き詰まりの打開を目ざす蘭学者たちが寄り集まっていた。有名な蘭方医の小関三英や高野長英、田原藩医の鈴木春山、同藩士村上定平らで、蚕学社中と呼ばれていた。

これとは別に、紀州藩儒の遠藤勝助邸では、尚齒会と称する自由気ままな談話会が開かれていた。民間人の政治談議を嫌う幕吏の追及を避けるため、敬老会的な名称を付けたが、実際には幕臣を含むさまざまな立場の有識者が集まり、日本近海に出没する西洋列強の艦船や天保飢饉への対応策を協議していた。華山や長英の他に、幕臣の江川英龍・古賀侗庵、水戸藩の藤田東湖らも参加していた。こうした動きを察知して危機意識

をつのらせたのが、幕府目付(公安警察高官)の鳥居耀蔵だった。耀蔵は大学頭(文部行政の元締)林述斎の四男だったから、華山が林家の塾頭の佐藤一斎の門人でありながら、蘭学者仲間と親交を結び、他の林家の門人に蘭学を勧めたりするのを見て、飼犬に手をかまれたように憤激した。「お家の一大事」という立場から華山や長英らを憎み、その弾圧の機会を狙っていた。

そんな時、モリソン号事件が起こったのである。米商船モリソン号が尾張知多の漂流民らの送還と通商を求めて来日した際に、異国船打払令により相模浦賀と薩摩山川で事情も確かめずに砲撃されて、むなしくマカオに戻ったという事件である。

同船が再渡来した場合、従前通りに打ち払うべしという評定所(幕府の最高裁判所)の決議を、幕吏の下役が尚齒会の席上で漏らしたことから、華山と長英は「日本国の一大事」と考え、それぞれ『慎機論』『戊戌(一八三八年)夢物語』を書いたのである。

長英はモリソン号という船名から、イギリスの名高い東洋学者モリソンが船長の英国船と誤解し、そんな船を問答無用で打ち払ったら、大変な事態を招くという警告を書いた。

『夢物語』と名付け、義太夫節のような読みやすい文体で、こんな対外政策は「日本は民を憐れまぬ不仁の国」「理非も分かり申さぬ暴国」という悪評を世界に広めることになり、日本国にどんな危険が及ぶか分からないから、変更すべきだと訴えたのである。

また、漂流民は有難く受け入れた上で、通商の申し出には長年の国是で変更できないと通告して拒否すればよい、と提言した。「夢物語」は写本の形で多くの有識者の間に回覧され、幕府高官にも好評だったという。一方、華山の『慎機論』は激情に駆られて書いたため、とても公表できないことに気づいて中断し、その内容は誰にも見せずに自宅で保管した。その一部を引用すると、こんな内容だった。

目次

題字「華山会報」元華山会理事

故小澤耕一氏

P ① 手書き文字 今むかし

P ② 全樂堂記伝(七) 別所興一 笠嶋忠幸

P ⑥ 手控冊『辛巳画稿』『壬午画稿』『癸未画稿』に見られる  
 依頼画について 中村正子

P ⑨ 華山会学童書道展

P ⑩ 四州真景の旅 ⑪ 中神昌秀

P ⑭ 令和3年度華山・史学研究  
 会研修視察 愛知県内の歴史遺産をめぐ  
 る 小川金一

P ⑯ 公益財団法人華山会  
 田原市博物館 からご案内

「西洋列強は航海術や砲術に長じ、わが国の短所を知っているので、勞せずして我が国を疲弊させることができる。こんな破目になったのも、中国の高尚めいて内容の空っぽな学問が盛んなため、井戸の中の蛙のような狭い見解に陥ったためである」

「政府高官に意見を具申しようとしても、賄賂で立身した成り上がり者ばかりである。また儒臣も視野が狭く、大を捨てて小を取る連中に過ぎない。こんな事なかれ主義の世の中では、ただ手をこまねいて外敵の侵入を待つより他ないのであるか」

このようにモリソン号事件をめぐり、蛮学社中と鳥居の対立が深まっただけでなく、江戸湾防備のための測量調査をめぐる両者の関係はいつそう険悪化した。老中の水野忠邦の指名した正使の鳥居は、旧式の測量技術しか知らない配下の小笠原蔵に担当させたが、副使の江川は華山の推薦により、洋式の測量術に精通した長英門下の内田弥太郎らに担当させた。その結果、復命書の内容

は精密さ・正確さで江川が勝り、鳥居は赤恥をかき、江川を支援した蛮学社中を憎悪するようになった。

しかも、江川は復命書に添付する予定の「西洋事情書」の執筆を華山に依頼した。華山は自分が長年取り組んできた海外事情研究やそれに基づく意見書を、幕閣に理解してもらい、幕府の対外政策に採用してもらう好機と考え、精魂込めて執筆し、江川に届けた。

例えば、西洋人の特性を、「西洋人は表面では平等の教えを流布し、みだりに武力を用いないと表明しているが、世界を自分の所有物のように見なし、全世界の支配を目ざしている。そんな彼らを蛮人と呼び蔑視するのは、盲人が象の体の一部を撫でて全体像を想像するようなもので、誤りも甚だしい」と説くなど、暗に現体制を批判する内容だった。そんな事情を察知した鳥居は、幕閣への上申を阻止すべく、蛮学社中を根絶する策動に着手した。小笠原に華山周辺の探索を命じ、華山宅に

出入りしていた配下の花井虎一の密告という名目で、華山一派の告発状を作成し、老中水野に上申した。

華山が天保十年（一八三九）五月十四日に江戸北町奉行所に出頭を命ぜられ、尋問を受けるに到った経過は、おおむね以上のようなようだった。

## 口書(口上書)の

### 内容と問題

月番交代の江戸町奉行では、通常五月当番は南町奉行の筒井政憲だったが、突然北町奉行の大草高好に変更した。幕府高官(老中水野)から筒井の次男下曾根金三郎は華山の蘭学門人ゆえ疑義あり、という指摘で変更されたものだった。実は大草自身も、その与力中島嘉右衛門も、華山の知人だったが、上司の特命ゆえ引き受けざるをえなかったという。主に中島により進められた華山への尋問は、懇篤なものだったので、華山は田原蟄居後に中島への謝意を込めて大作「于公高門図」を描いている。

華山逮捕の情報は逮捕の翌日に華山の同志や画弟らに伝わり、画弟椿山を中心に華山救援運動が始まった。その様子は椿山が書いた「麴町一件日録」にいきいきと記されている。短期間に集められた、牢見舞の金子を牢内の下役に握らせることにより、華山は平囚人よりも恵まれた生活を過ごせるようになった。

こうした状況下の尋問を通じて作成された口上書の内容を、華山が獄中から獄外の知友に宛てた書簡などと関連付けて、その問題を明らかにしたい。ただし、『全樂堂記伝』所収の「口書」と「申渡之書」は、誤字・脱字や欠落文が多いので、蓬左文庫蔵本を底本とし、田原市博物館蔵本と豊橋市立図書館蔵本により補訂したものを検討したい。

最初に華山は、自分が蘭学に関心を抱いた経過について、七年前に藩の家老職に任用され、海岸掛りを兼務したことから、西洋諸国の事情、教育・政治・軍事などを理解したいと思ひ、幡崎鼎(水戸藩の蘭学者)・

小関三英・高野長英らと交際して西洋事情につき一通りのことを学ぶことができた」と説明した。その上で「私儀ハ幼年より文武芸術相励、右余暇画を学び、華山と号し慰ニ認物等致し候処、不計世間二名を被知候様ニ相成、当時ハ門人等も多人数有之、外々より認物頼ミ多く、殊ノ外忙敷、其上日勤之身分、主人家政向（藩政關係）取扱等ニ而寸暇無之候」と記し、そのため「蘭学之儀ハ見識浅く、未自己之了簡を以解釈等致兼候」と謙遜している。

とは言え、モリソン号の渡来については、「右モリソンは漢学ニも達し候故を以、漂流難民を送候ニ託し、彼国之事情を訴え、交易を相願候儀ニ有之候処、右子細御糾問も無之、御法令之通打払被仰付候而は、御仁恵之御趣意不相当、蛮国之者恨を結候而は国家之御為ニも相成問敷と懸念心配致し、存慮之趣書面ニ書綴り見可申」と、問答無用の打ち払い政策はご仁政の趣旨に反し、我が国のために不適當であると説いている。

しかも、その所説をまとめた書面では、「西洋事情之儀御尋を蒙り奉畏候。不案内之事にハ候得共、想像仕候だけを申上候と申書出しにて一打ニ相認候。書中悉く蛮国治乱之事を記し、教政学校之盛なる事日本唐土（中国）之所及無之杯書頭し、且日本海辺諸島洋人之領ニ無之ハなし。唯其国を不失ものハ百尔細亜、我邦而已ニ御座候。存出候へバ誠ニ心細事ニ御座候。然るに不知ハ井蛙に斉しき心持ニ御座候」と記し、西洋諸国の政治や学校教育制度の充実ぶりには我が国や中国はとでも及ばず、世界の大部分が西洋諸国に領有されていると指摘している。別の箇所では、「西洋人から見れば、わが国はあたかも道端に捨てられた肉のような餌食だ」と警告を発している。

また、「古時変に随ひ政を立候儀ハ、古今之通義ニ御座候」と政治は時勢の変化に即して変更するのが古今の通義であるとし、「太古ノ世日本僅に大八洲に限り、……終に太閤之征伐（豊臣秀吉の朝鮮出兵）ニ相

成候。中葉耶蘇之邪教ニ懲リ、規模縮小ニ相成、只一国を治に急なる故、終に海外の侮を請候事共、已後之變如何を不存候ハ如何と云々」と評している。キリスト教の危険性（島原の乱など）に懲りた後の政策では、視野が狭くなり、自国の統治だけで精いっぱいになったため、海外諸国の侮りを受けるようになった。その結果、この先どのような事変が起るか予想できないと嘆いている。

さらに、「權（霸權）地球ニ及候。洋人ハ実ニ大敵と申も余有之候事ニて、何卒此上ハ御徳政と御規模之広大とを所祈也と相認候得ども、未得意ニ無之候間、別ニ議論を起し、慎機論と題号致し候積ニテ」と記し、幕政批判の罪状の決め手になった未定稿『慎機論』の成立事情を明らかにしている。

「然に朝儀（幕府）、鄂羅斯使節（ロシア使節レザノフ）之例之如く、彼国（イギリス、モリソン号をイギリス船と誤認）一箇の故を以て、御国制（我が国の制度）之御変違不成事

ハ、譬是より事生るとも動くべからざる大道なるべし。然と雖、西洋諸国の道トスル所、我道とする所と、理に於テハ有て無二と雖も、其見の大小の分なきに非ず。是能彼を審にする者にあらざれば、盲瞽想像之如く、一尾一脚も象は即象也。若尾ヲ捉り象を説バ、垂鼻長牙又何にあらんと認」と記し、イギリス一国の要望で我が国の国是である鎖国政策を改めることはないが、西洋諸国の目ざす道と我が国の目ざす道は道理において一つであって違いはない。その解釈には多少の違いはあるけれど、相手側の事情をよく知らなければ、盲目の人が象の体の一部に触れて象の全体像を想像するように、大きな誤解・偏見を持つことになる、と警告している。

別の箇所では、交易を求めるイギリスが、漂流や飲料水不足などで救助を求めてきた場合、「貴国海岸蔽備にして航海ニ害ある事、一国の故を以て地球諸国の害あらんにハ、同じく天地を載踏して類を害ス、豈是

を人と謂んや。貴國に於て能此大道を解シ、我天下ニ於テ望所ノ報ヲ聞カン」と鎖国体制を批判してきたら、どうするのか、と詰問している。イギリスは、一国の事情だけで地球諸国の守るべき、人の道〴〵を無視し、他国の迷惑を省みない日本の政策はあまりにも横暴ではないかと訴えるから、人の道〴〵を理解した回答を示さなければ、かえってイギリスに武力侵略の口実を与えることになる。

他方、西洋諸國が自然環境の面では悪条件にありながら英明な指導者を得て隆盛を來たした要因は、「土地の豊福も不可頼、人の衆多も不可喜、其唯動憂（つとめ憂う精神）にある乎。凡政ハ扱る所に立、福ハ為す所に生ず。今國家所扱は海、所安者外患、一旦恃むべきもの不可恃ハ可安者安ずべからず。然に安頓（安堵）して徒に太平を唱ふハ固より論なし」と書き、現状に甘んじないで前途を憂慮し、現状打開のための行動に踏み出すことの大切さを指摘している。一体政治は信頼できる扱所がある

て安定するものであり、わが国は周囲の海のおかげで外患を心配する必要がなかったけれど、航海術や砲術の進歩により、その安定も脅かされるようになった。それなのに、そんな現状に無頓着で太平を謳歌する者は論外である、と嘆いている。

さらに「右之通議論を立、末に海防心得方を記し候積ニテ、未だ稿を終り不申候処、禁忌を犯し候語有之候ニ付、恐入候儀と心附、其俛にて筆を止め、他見等ハ更に不為致、仕舞置候儀ニ有之」と、『慎機論』が幕政批判のタブーを犯す恐れのあることに気づき、執筆を中断して誰にも見せずに自宅に保管した事情を説明している。

この後、華山が西洋諸國の事情を分かりやすく対談形式でまとめた『駄舌或問』『駄舌小記』という著書の稿本の作成経過を説明したり、好奇心に駆られ幡崎鼎・小関三英・高野長英らに師事して蘭学を学び、政治向きの事も論じたりしたことを打ち明けている。ただし、私が蘭学研

究を勧め、蘭学者仲間を集い主宰したのは、私の主人である土佐守隠居（田原老公、三宅友信）ではなく、食客の大叔父の鋼藏という者である、と虚偽答弁している。友信に幕政批判の罪の累が及ぶのを防ぐためである。他の箇所でも、華山は自身自身の罪の軽減よりも、師友や縁者に罪の累が及ぶのを食い止めることに苦慮していたことが知られる。

その他、華山逮捕の罪状として挙げられた無人島渡航計画（伊豆の小笠原島に渡航して外国に脱出するという陰謀）や大塩平八郎（大坂で救民・幕政批判の拳兵を起こした）との通信が無実であることなどを、具体的な証拠をあげて詳述しているが、紙面の都合で割愛する。

無実の罪で別件逮捕された華山らの釈放は、時間の問題と考えられたが、目付鳥居や老中水野は幕藩体制護持の立場から華山ら蛮学社中の根絶を画策していたため、家宅搜索で押収した未定稿『慎機論』などから、前掲のような幕政批判の文言を摘発

し、それを有罪の決め手とした。尋問も北町奉行の大草や与力の中島に一任せず、鳥居の腹心の目付佐々木三藏に立ち会わせ、口書の結びに「右始末、不憚公儀不埒之至、重役相勤候身分、別而不届ニ付御吟味を請、無申披奉誤（謝）候」の文言を書き加えさせたのである。天保十年（一八三九）七月廿四日のことだった。

同年六月九日に華山は獄中から鈴木春山に送った書簡で「俄ニ事（菑社の獄）ヲ生ジ候義、恐クハ小笠（小笠原貢藏）ノ嘘吹と存候。其分ケハ草尹（大草高好）ノ御沙汰（評定）ニ鳥印（鳥居耀藏）申立ト有之候。然ル上ハ事ヲ起シ候ハ、鳥ニ無相違、其策尤巧也」と書き、政治謀略の全体構造を的確に捉えている。

また、「僕於心実疾シキ事更無之候得共、何分ニモ数十年ノ思ヲ積ミ、少シモ國家ニ功アラン事ヲ欲シ、今秋ヨリハ猶勢ヒヲ鼓セント存候所、百日ノ説法庇一ツト相成」と、自分の長年の思索や労苦がつまらない結果となった無念さを告白している。

手控冊『辛巳画稿』

『壬午図稿』『癸未画稿』

に見られる依頼画について

研究会員 中村正子

華山自筆の手控冊は幾冊も残されており、その内容は中国・日本の絵画の縮図、日常に目にした風景・人物・動植物のスケッチ、情報メモ、画作の小下絵などが含まれていす。特に今回取り上げた三冊の手控冊には華山の弟五郎・町人・草花のスケッチなどありますが、殆どが依頼画の小下絵であり、文政四年から六年、華山二十九歳から三十一歳の依頼画制作記録となっています。

華山のこの時期の画作が生活を助けるものであったことは『退役願書稿』には当時を振り返って記されており、文化十二年、十三年の『寓画堂日記』『華山先生謾録』に初午灯笼に貼る絵などの内職に励んでいたことが書かれています。文化十四年父定通は年寄役末席となり八十石から百石四人扶持となりましたが、窮

乏生活は続いていようです。文政六年、華山が結婚をきっかけに自省のために記した「心の掟」（松岡次郎著『全楽堂記伝』）に

一、両親ヲ匿シカラズ可致様心得ヘキ事

一、学問ヲシテ遠ク慮リ画ヲカキテ急ヲ救フ事

と書かれてあり、両親に窮乏生活をさせないように画を描く決意が記されています。

この三冊の手控冊が書かれた文政四年から文政六年、華山の家は父定通の病気の進行と薬代、弟定意の同僚不和による帰留とその対応、母方の伯父河村家の寄寓などがあって生活は益々厳しい状況下であり、華山の生活を支えるための画作は急務でありました。文政元年『江戸當時諸家人名録』二編（扇面亭編）に名前が載り、文政二年日本橋百川楼で書画会を開き、「華山」の画名も知られるようになりましたが、武人である華山には市井の職業画家のように直に収入には結び付くものではなかったと思われる。当時の華山には依頼画は潤筆料につながり、依頼者

は有難い存在でありました。この三冊の手控冊には八一名の依頼者名が書かれています。不詳者、判読出来なかつた人を除き8ページの表にまとめました。

旗本の神谷左内は華山と親しく交流があつた人物です。手控冊には長幅（長型かけ幅）二十三、扇面十、襖、屏風の依頼画の図があり、依頼の文面に「以上四枚神谷公」「神谷公二十枚の中」「以上六枚神谷公」などありますから実際の依頼画はかなりの量だつたと推察されます。神谷左内のこれほどの画作の依頼は華山にとつてはパトロンの存在の人物と察せられます。

山口勝之助直温（山口勘兵衛）は『寓画堂日記』『華山先生謾録』に山口君の名で度々見られる華山の友人で『辛巳画稿』には十枚の角図『壬午図稿』には六曲一双の立派な屏風画の依頼がみられます。文政七年華山の父定通が病歿し、霊前に供えられた弔詩（『渡辺華山集』3巻書簡）に勘兵衛のほか山口相模守直勝・渡邊甲斐守・津田勘七郎の詩があり、彼らも華山との交友が窺われます。

この三名も依頼をしております。

津田勘七郎は明石藩士であり、田原藩邸と明石藩邸は隣接しておりましたから華山は明石藩の人々との交流がありました。津田勘七郎景彦は『文政武鑑』（六年）に御城使とあり、『明石藩史』『斉韶公』文政三年に、濃州・勢州震災地修治の件で時服・銀を賜つたと記されています。又和文にも優れ、『山崎物語』の著もあり、文政七年華山「調馬図巻」（椿華谷模写）に跋文を書き絵画が言葉にも優る表現であることを称賛しています。

華山の生涯の友人であつた鈴木春山、鷹見弥一右衛門・生田何右衛門・上田順右衛門・中嶋源之助など田原藩の人々も画を依頼しております。表にはありませんが『辛巳画稿』に六四郎・助九郎・半十郎・半治・太平治・半吾の名前があり、多くの絵を依頼しています。彼らも田原藩の人々ではないでしょうか。華山の弟堀田留之助も長幅・角図を依頼しております。

華山が十九歳の時から儒学の師として仰いできた佐藤一斎とその門下生、華山にとっては学友からの依頼

も多くあります。先に述べた「心の掟」には

一、交り候人一斎佐藤思齋本多コ  
ノ二人ハ心事ノ相談致シ万事  
不隠候事

とあります。文政四年に描かれた『佐藤一斎像』（東京国立博物館蔵）とその画稿「第二」「第十一」などに見られる真に迫る写実的な描写は華山の師を鋭く見て学ぼうとする姿勢が窺えます。『佐藤一斎像』にある「受業弟子渡辺登拝手敬写」の文面からも師への尊敬が察せられます。本多思齋は『華山先生謾録』文化十三年三月二十一日に「悔齋詩会遇本多茂市此稲葉守殿藩中：」に居住先が書かれていることからこの時からの友人と思われれます。佐藤一斎・林述齋門下の安積良齋と華山との親交がいつ頃始まったかは分かりませんが、『癸未画稿』に「絹本 重信先生近聰寺はり出し」「安積良齋殿」と書かれておりますから師としての存在であったと思われれます。

椿山・孤月は華山の家の状況を理解していたからでしょうか、多くの画の依頼があります。椿山には六幅

の長幅のうち四幅が竹・竹蘭図であり、孤月は六曲一隻の山水図屏風を依頼しています。弟子の一木平蔵、

画友の星城の依頼もみられます。小林左伝・小林甲斐は『四州真景』にも見られる人物です。小林甲斐は芭蕉の人物像を依頼しており、華山の俳句を通しての友人かと思われれます。鍵屋半兵衛・永田田善・平澤左仲・岡田閑林など当時名の知れた依頼者は華山の師文晁を通しての知人ではないでしょうか。表の最初にある秋田山城守・脇坂中務太輔の依頼も文晁に関りがあつたかとも思われれますが、小笠原近江守を含めて三人の江戸城の詰所が田原藩主三宅康和公と同じ「帝鑑間」であることも興味深く思われれます。

表中にない人物、朝倉章大・為田斧三郎・芝崎兵庫・大久保上總介などには「殿頼」と書かれてありますから幕臣かそれに匹敵する人物と思われれます。翠岳公は華山の友人で『寓画堂日記』『華山先生謾録』にも依頼画の記述がありますが、詳細は不詳です。巴陵・生駒永・松木彦左衛門・榎全堂など多くの絵の依頼者の

調査も不詳に終わりました。

文政四・五・六年の華山の困窮な時期の生活を救う為の画作には以上述べてきましたように師と多くの友人・知人の依頼画の助力がありました。華山の常日頃の誠実勤勉な姿と孝養を尽くす姿に彼らは手助けを惜しまなかったと思われれます。『辛巳画稿』『壬午図稿』『癸未画稿』は他の手控冊には見られない華山の画活動の一面が見られるものであると考えられます。

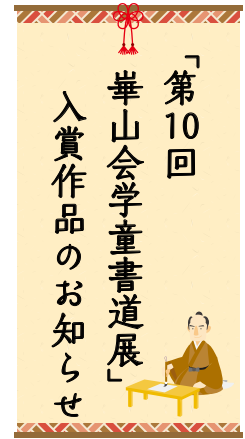
『癸未画稿』にある佐藤一斎嘱「藤原惺窩像」の依頼画は東京国立博物館に所蔵されております。他の多くの依頼画はどのようなものになっているのでしょうか。『渡邊華山先生錦心図譜』上巻22「牡丹金鶏」は『辛巳画稿』『以上神谷公』に、62「卓文君」は『壬午図稿』『津田勘七郎頼稿アリ』に、『壬午図稿』『津田勘七郎頼稿アリ』に、67「月梅」は『癸未画稿』『クハセン紙 一斎先生頼』に、72「蘆雁」は『癸未画稿』『重信子頼登』に、95「蜆子和尚」は『辛巳画稿』『以上巴陵』に同図のものがあります。



これらは依頼画ではないでしょうか。62「卓文君」図の落款印が白文小長方印「華山」になっているのは後捺と思われれます。67「月梅」は月明りに映える梅が繊細に描かれ、図中に「華山樵者登写」と朱文亀甲印「登」朱文長方印「全樂堂記」白文長方印「江戸乃人」が捺され、左上部に七言絶句「月照梅花尋好主 花邀月影作佳賓 唯賓與主雙清絶 管領黄昏一刻春」の題詩と「癸未小春江都一斎題」が添えられています。この絵は「渡辺華山百年記念展覧会」（昭和十五年九月）に出品されたもので、現存すれば是非拝見したい作品であります。

依頼主	辛巳	壬午	癸未	主な絵画内容	依頼主	辛巳	壬午	癸未	主な絵画内容
秋田山城守 秋田孝季 奥州三春 五万石 帝鑑間	長幅1	長幅1	長幅1	杜甫急行図	堀田留之助 華山弟 水野伯耆守家臣堀田文左衛門養子	長幅2	長幅2	長幅2	竹石図 蘭図
脇坂中務大輔 脇坂安童 播州龍野 五万石 帝鑑間	長幅2	長幅1	長幅2	竹石図	佐藤一斎 漢学者 美濃岩村藩家老の男 名坦 別号	扇面9	長幅3	長幅3	惺齋・道春肖像
小笠原近江守 小笠原貞温 豊前小倉新田 一万石 帝鑑間	襖1	長幅9	長幅6	市井生活人物図	愛日楼 林述斎門 林家塾頭 昌平塾教授	扇面6	襖1	扇面6	図 月梅図
神谷公 神谷興治右衛門左内 中奥小姓衆 二千石	長幅7	長幅7	長幅6		本夢茂一郎 漢学者 名林 佐藤一斎門の高弟	長幅6	襖1	襖1	山水図 漁夫図
山口葛峰公 山口勝之助直温 勘兵衛 使番衆 火事場廻	扇面5	扇面5	襖1	花卉・花鳥・山	菊池順助 漢学者 佐藤一斎門下 篠山藩儒	襖1	襖1	山水図	
林内蔵 二百五十石 華山友人	扇面1	扇面1	長幅2	水・竹蘭図など	三谷慎齋 漢学者 佐藤一斎門下二本松藩儒	長幅2	扇面3	長幅3	牡丹猫図 蘆雁図
山口相模守 山口勝次郎直勝 中奥小姓衆 三千石	扇面1	襖1	長幅1	竹図 海老図	大島精一郎 漢学者 号松州 佐藤一斎門下	長幅1	長幅1	長幅1	竹石図 人物図
渡邊甲斐守 渡邊彈正輝綱 中奥小姓衆 三千石	長幅1	襖1	長幅1	人物図	鍵屋半兵衛 石田醒齋 日本橋呉服商 山本北山に学ぶ	長幅1	長幅1	長幅1	花卉図 蘭竹図
岡野孫十郎 寄合衆 九百十二石	長幅1	扇面1	長幅1	芭蕉鶏図 菊図	宮崎貞順 不詳 医師か 宮崎貞順著「傷寒論和語示蒙」	角図2	角図2	角図2	菊図 梅花図
永井左門 阿部大学正信 寄合衆 七千石	長幅1	扇面1	長幅1	朝顔草花図	天保8 あり 華山友人と思われる	表紙か1	角図1	角図1	漁夫子供図
安部大学 水野出雲守 寄合衆 二千五百石	扇面1	扇面1	長幅1	蜆子和尚	孤月 江口孤月 通称辰之助 五代太白堂桃隣の弟	角図6	角図1	角図1	月燕図 漁夫図
新見伊賀守 新見正路 西丸附目付衆 二千石 蔵書家	長幅1	扇面1	長幅1	秋草図	子 文政四年十六代を継ぎ 華山挿画の歳旦帖	扇面5	扇面5	扇面5	朝顔図 花鳥図
吉川加賀守 吉川一学 小納戸頭取衆 千石	扇面1	扇面1	長幅1	竹図	「桃家春帖」の刊行を続ける	襖1	長幅1	長幅1	柿樹図
宮城靱負 宮城靱負朝雄 小普請 四百石	長幅1	角型1	長幅1	蘆雁図	椿山 椿椿山 名弼 通称忠太 別号琢華堂 幕府	扇面1	長幅1	長幅1	山水図
渡辺越中守留守居 泉州伯太藩の留守居	長幅3	扇面1	長幅1	竹石図 老師図	槍組同心 初め金子金陵のち華山に画を学ぶ	長幅1	長幅6	長幅6	梅花図 蘭竹図
有馬藩士 有馬左衛門佐 越前丸岡 五万石 帝鑑間	長幅1	角型1	長幅1	公家図	旗本浦賀奉行渡邊甲斐守輝綱用人 華山弟子	長幅1	扇面1	扇面1	鍾馗図 樵夫図
山田三助 明石藩士か 明石藩座並帳に記載あり	長幅2	角型1	長幅1	図なし	一木平蔵 谷文晁系の絵師か 華山友人	長幅1	長幅1	長幅1	鍾馗図 鍾馗図
津田勘七郎 明石藩士 津田景彦 硯寿堂 華山友人	長幅1	長幅3	長幅1	寛永三輔図	星城 須賀川	長幅1	長幅1	長幅1	金燈籠図
堀備後 父巴州の友人か 退役願稿に名あり	襖1	長幅1	長幅1	兔図	小林左伝 須賀川	長幅1	長幅1	長幅1	鍾馗図
鈴木春山 田原藩医・藩儒 別号童蒲 華山友人	長幅1	長幅1	長幅1	蘆雁図	小林甲斐 「知己詩囊」に俳諧師 如是庵 麹町隼町	長幅1	長幅1	長幅1	人物図(芭蕉)
鷹見弥一右衛門 田原藩士 鷹見爽鳩の子 定美	長幅1	長幅1	長幅1	達磨図 花禽図	山内熊之助 名晋 号香雪 一枝堂 書を市河米庵に学ぶ	扇面5	扇面2	扇面2	山水図 牡丹図
上田順右衛門 田原藩士 「四州真景」にあり	長幅1	長幅1	長幅1	卓文君図	董山 「筆道師家人名録」浅見奏助か	長幅1	扇面1	扇面1	桜図 藤図
笹山君 田原藩士 生田何右衛門 雅号笹山	縮緬	長幅1	長幅1	占梅花心易図	閑林社中瞿河 岡田閑林 江戸後期文人画家の社中の者か	長幅1	横大1	横大1	漁夫図
源之助 田原藩士中嶋源之助か 三宅友信近習	長幅1	長幅1	長幅1	牡丹図 竹蘭図	平澤左伸 「知己詩囊」狂歌部 平澤随龍 名直広	長幅1	横大1	横大1	と狂歌あり
				竹蘭図 竹蘭図	大坂屋 大坂屋秀八 草紙問屋文英堂 江戸本石町か	扇面3	扇面3	扇面3	葡萄図 竹図
				松図	三州長泉寺 愛知県蒲郡市五井町 長泉寺 三河七御堂か	長幅1	長幅1	長幅1	梅花図
				蓮蟹図					
				水禽図					





公益財団法人華山会では、郷土の偉人渡辺華山の遺徳を学ぶ機会として、学童書道展を開催しております。田原市内の習字教室に通う小学生、中学生を対象に作品の募集をしたところ、小学生127点・中学生31点の応募がありました。応募総数158点の中から、優秀作品48点を選定し、そのうち特選作品7点をご紹介します。

ご紹介させていただきます。

ご応募いただきました皆さんやご協力をいただきました習字教室の先生方に厚くお礼申し上げます。

公益財団法人華山会



低学年の部

入選

- 小久保十輝
- のむらゆうぜん
- 渡會 彩太
- 城間 奏沙
- 青山 奈穂
- 岡田 かほ
- 福井 柚花
- 藤井 柚帆
- 小久保晴海
- 清田 徠生
- みやちゆいと
- きむらそうた
- かわいすみれ
- 山本優亜菜
- 荻谷 美桜
- 小林柚衣翔

高学年の部

入選

- 太田 光咲
- 中嶋 ゆり
- 小久保琥太郎
- 大下 侑記
- 小田島沙愛
- 久保山結衣
- 木戸 優月
- 鈴木 菜帆
- 尾澤 怜奈
- 田中 詩乃
- 水島 瑠眞
- 藤村 遥菜
- 井本 有咲
- 小久保拓馬

奨励賞

- 森 菜津美
- 大谷 吏功
- 栗田 奏音

中学生の部

入選

- 宮川 結衣
- 渡會 桃音
- 藤田 彩花
- 橋本 桃花
- 渡會 遥
- 小久保歩海
- 河邊 愛佳
- 小久保茉莉

奨励賞

- 小久保茉莉

『四州真景の旅』⑪

田原蟄居中の作画と心境

研究会員 中神昌秀

一 序

四州真景図（重要文化財、個人蔵）は、文政八年（一八二五）夏、華山三三の歳、利根川下流域を旅した時のスケッチ画入り紀行文です。晩年、田原蟄居中に着色されたことが日記に書かれています。今回は、田原蟄居中の作画を辿り、四州真景図が名品に至る背景を解き明かす旅を試みたいと思います。

二 失意の蟄居生活

蟄居中の華山の心境については、天保一二年（一八四〇）三月二五日付の一木平蔵ら門弟、友人等一人に宛てた手紙を引用し、江戸育ちの華山一家が如何に淋しい思いをしていたかを強調しているものが多くみられます。

その手紙は、次のように書かれています。

『此地大洋相廻リ濤声日夜トウ〜 相響、夜中ナド不計目覚候得ば、都二なれぬさびしきにて、涙の枕ヲウ（ル）ヲシ候事モ有之、又雪隠へ参候時狐ナドニヲドサレ、又蛇の座敷に出候ナドハ肝ツブレ、又子供の川にこけ池にハマリ竹藪ニテフミ拔致候ナドモ心遣ひかぎりなく、かゝる身の上二候得ば他人へハ逢不申、偶来候もの

ハいつも猪・猿・菜・大根・殺生ナドの咄聞あき、用アレバトテ隣といへど遙にて心細き事も多く、唯悲しきハ母妻子の慰み無之、タマ〜浜見物・寺参りなどに参り候とて、一面ハ峨々タル山一面ハ滾々タル海ニテ、其間田圃井二相連り、径路斜行ノミニテ何ひとつ目覚しき事も無之、クタバレ候とて休み候処も無之、』

これを口語訳すると次のようになります。『こゝ田原は、太平洋（遠州灘）が半島の南側を囲み、昼となく夜となく、海鳴りが響き、夜中に思いがけず目覚めてしまう程で、自分は田舎暮らしに慣れこともできず、寂しさのあまり、涙で枕を濡らすこともあり、又便所へ行く時には、狐に出くわして驚かされ、蛇が座敷に出た時など、驚き肝をつぶすほどです、又子供が川で転んだり、池に落ちたり、竹藪で竹を踏み抜くなど心配の上なく、この境遇では、他人と逢うことなど考えられません、偶然に遭遇するのは、いつも猪や猿であり、畑の菜や大根であり、鉄砲での狩りや投網や釣りの話など聞き飽きたことばかりで、用事がある時だけというものの、隣は遙に離れていて心細い限りです、ただ悲しいことは、母や妻や子供の楽しみはなく、たまたま海を見に行ったり、お寺参りなど行ったりしても、一面は山がそびえ、別の一面は滔々とした海が広がり、その間には田が井の字形に連なり、細い道は斜め何一つとしてよいところはなく、疲れた時も休む所もない有様です』

このように、華山は田原での蟄居生活について、

太平洋の波濤のせいで不眠がちになり、江戸を思いだしてはつい泣いてしまい、狐や蛇の座敷に驚かされ、子供の心配ごと絶えないうし、母や妻の楽しみもなく寺参りに出かけてもまわりの景色は山か海でその間には田が広がっているだけの何も無い田舎だと、不安や不満を切々と訴えています。この文章は、決して大げさなものではなく、田原蟄居の感想が率直に書かれたものであると思います。



渡辺華山池ノ原幽居跡（復元）

### 三 蟄居中の絵画作品

書簡からは、蟄居中の華山がひどく落胆している様子が窺えますが、蟄居中の絵画に対する創作意欲についてはどうだったのでしょうか。その前段として、まずどんな作品があるかをみていきます。ところで、華山の蟄居生活は国許へ護送され田原へ到着した旧暦天保十一年一月二〇日から始まります。そして、旧暦天保十二年（一八四一）一月一日の自刃の日に終わりを迎えます。

蟄居初年の天保十一年は、海錯図 文化庁の名称は游魚図（重文 絹本着色一三・三×五五・四cm 静嘉堂文庫美術館 公益財団法人静嘉堂蔵）、鷗鷁捉魚図（絹本墨画淡彩一〇・三×四一・一cm 出光美術館蔵）、異魚図（重美 紙本墨画淡彩三七・五×六七・二cm 個人蔵）、ヒポクラテス像（絹本着色一一〇・三×四一・七cm 九州国立博物館蔵）などがあります。

蟄居二年目であり最晩年となる、天保十二年は、于公高門図（重文 絹本着色一三二・四×五〇・二cm 福田美術館蔵）、千山萬水図（重文 絹本着色一四七・五×七一・八cm 田原市博物館 田原市蔵）、蟲魚帖（重文 絹本着色一帖 一二図各二七×二四cm 個人蔵）、月下鳴機図（重美 絹本着色一二七・九×五六・九cm 静嘉堂文庫美術館）、黄梁一炊図（重美 絹本着色一四六・一×七一・五cm 個人蔵）などがあります。また、天保九年（一八三八）から一二二年にか



千山萬水図

けての作品として翎毛虫魚冊（紙本着色 画帖 二冊二二・七×一四・三cm 草雲美術館蔵）、があります。

このように、蟄居中の作品には重要文化財、重要美術品に指定された名品が多数あります。また、無指定の作品も名品ぞろいで、特に鷗鷁捉魚図は重文に指定されても不思議ではないほどの名品です。晩年の華山絵画のレベルの高さが判ります。

### 四 蟄居中作品の作画年遡及

蟄居中に描かれた作品は、日記や書簡などにより明白ですが、本来の作画年とは異なる遡及された年号が書かれている作品が多くあります。

これは、蟄居中にもかかわらず、売画など不謹慎極まりないという批判が上がり、幕府から更に咎められたり、藩主に迷惑をかけることを回避するためのものと言われています。なお、次ページ下段「華山年齢・西暦・元号・十千十二支対照表」を見ながら読むと遡及の話が分かり易いと思います。

作画年の遡及の一つが、天保十一年の鷗鷁捉魚図です。この図は「乙未六月下浣」と款記があります。天保の乙未（きのと ひつじ）は、本来は天保六年（一八三五）に当たります。しかし天保十一年の日記である守困日歴の七月一日には「畫青緑山水、鷗鷁捉魚、鈴木春山持去」と書かれていて、遡及が裏付けられます。

もう一つ遡及について、蟲魚帖が挙げられます。最後の一二図左には、「時丁酉八月晦全樂道人」と款記があります。天保の丁酉（ひのと）りは本来は天保八年（一八三七）に当たります。しかし天保一二年八月三〇日付け椿椿山宛書簡の中に「**然ば御約の草虫書画共二十四葉出来差出候**」と記述があります。蟲魚帖と草虫書画は、書簡中の画題と蟲魚帖の内容の一致から同一のもので、天保一二年の作画が確認できます。

その他、海錯図にも遡及があります。この図の款記は「甲午秋月戯写華山外史」と書かれています。甲午（きのえ うま）は、本来は天保五年（一八三四）を指します。しかし、椿椿山宛の書簡「絵事御返事」と華山の日記「守困日歴」から天保一一年一〇月末の作であることが裏付けられます。

遡及を裏付ける日記や書簡はありませんが、遡及が認められるものとして「千山萬水図」があります。この図は「千山萬水図丁酉六月朔五日迎快風寫之子安」と款記があり、本来なら天保八年に当たります。しかし華山絵画研究の大家、故菅沼貞三氏は、その著書の中で「華山と署せず、子安と署している点とその筆致著彩から、年記を遡及した田原蟄居中の製作と考定される。」と書いています。

なお、年の遡及がないものとしては、異魚図があります。これには庚子（かのえね）十一月朔六日と記されています。天保の庚子は天保一



千山萬水図款記

一年です。また、作画年が書かれていないものとして、于公高門図があります。これについても、蟲魚帖と同じ天保一二年の椿椿山宛書簡の中に「**于公高門図にて隙入、不及本意候。**」という記述があり、天保一二年の作画であることが判ります。

このような作画年の遡及については、以前から指摘があります。例えば、菅沼氏は「在所蟄居の華山は公儀を憚って圖中の年記は必ず天保十年己亥の厄に遭ふ以前の干支を用ゐたことはその作例が存してゐる。その歳月の記入に當り年の干支は過去と為し、月は同一に為すこと亦當時の遺品の多くが示ところである。」（『華山の研究』一一五ページ）と書いています。また、

文星大学名誉学長の上野憲示氏も、「丁酉への年の遡及は天保一二年制作を示し、月日はそのまま正しく記している」としています。

華山年齢・西暦・元号・十干十二支対照表

華山年齢	西 暦	元 号	十 干 十 二 支		備 考
42歳	1834年	天保5年	甲午	きのえ うま	
43歳	1835年	天保6年	乙未	きのと ひつじ	
44歳	1836年	天保7年	丙申	ひのえ さる	
45歳	1837年	天保8年	丁酉	ひのと とり	モリソン号事件
46歳	1838年	天保9年	戊戌	つちのえ いぬ	憤機論
47歳	1839年	天保10年	己亥	つちのと い	蛮社の獄
48歳	1840年	天保11年	庚子	かのえ ね	蟄居
49歳	1841年	天保12年	辛丑	かのと うし	蟄居 自刃

**モリソン号事件:** アメリカ商船モリソン号が日本人漂流民を乗せ江戸に向かうが浦賀で砲撃を受け退去  
**憤機論:** 理由を問わず異国船は打払うべしとの評定所答申案を聞き幕府の方針と誤解、憤激し憤機論を書く  
**蛮社の獄:** 目付の告発により北町奉行に召喚され揚屋入、憤機論押収、12月に在所蟄居の申渡

## 五 鷹見泉石像と日比野説

華山の最高傑作とされる、古河藩土井家家老をモデルとした肖像画の鷹見泉石像（国宝 絹本着色 一一・五・一×五七・二cm 東京国立博物館 独立行政法人国立文化財機構蔵）の作画年については、「天保鶏年槐夏望日寫華山渡邊登」と款記があります。「天保鶏年」は、天保の中で丁酉（ひのと とり）となる天保八年、「槐夏」は四月の異称、「望日」は一五日ですから、天保八年四月一五日を指しています。

しかし、常葉大学名誉教授の日比野秀男氏は泉石像作画年に関し、天保一二年説を主張しています。田原市博物館特別展図録（平成一七年）の「椿椿山筆渡辺華山像をめぐって」という論文の中で、「華山が泉石の肖像スケッチを描いたのは天保一〇年の二月から三月のことであった。そして、おそらく華山が泉石像を完成させたのは、天保一二年四月一五日であったと推定される。」その理由として、泉石像の款記の「華」の文字に着目し、「鷹見泉石像の制作年代の推定は、華の書体から同様なものを選びそれらの制作年代から天保十二年四月十五日と推定したわけである」（図録一一二ページ）と書いています。

この説は、泉石像の画稿を天保一〇年に描き、それを基に、蟄居中の天保一二年に本稿を完成させたとするもので、華山の蟄居中の創作の中に国宝が加わり、充実ぶりが更に増すのですが、日比野氏以外、泉石像の日付遡及を主張する学者はいません。蟄居中の作品は十分充実してい

るので、とりあえず、泉石像は含めないこととします。

## 六 逆境を跳ね返す魂の作画

蟄居中の華山は、高い創作意欲のもと、制作年の遡及までして、逆境を跳ね返すかのように名品を次々に制作していきます。絶筆と言われる黄梁一炊図は、夢の中で出世し宰相になったが、目が覚めると黄梁も煮えない程の短時間の夢だったという中国の故事を描いたものですが、殺気を含む険しい心が窺われ、寒風の如き凄愴な畫致を含むと表現されています。この作品だけに限らず、晩年の名品すべてに、魂の作画とも言えるべき強い情念が込められています。そしてそれは、華山にとつて、残された情熱を傾ける対象が、絵画だけになったという消極的なものではなく、絵画以外の雑念を積極的に捨て、華山の能力すべてを絵画に向け、魂がその一点に集約された結果とも言えます。

晩年の名品すべてに張り詰めた空気が漂い、山水画の精緻で端正な描写、花鳥画の鳥や魚の大胆にデフォルメされているにもかかわらず、リアリティ溢れる表現、その背後の悲しみと怒りに満ちた魂、そこからは怒りと悲しみが混じった叫びが溢れ出してくるようです。

蟄居中の作品について、菅沼貞三氏は『華山の研究』（引用は一部省略）の中で、「華山晩期の作品の主要なものに就いて、いづれも寫生を骨子として、自然描寫の正鵠な上に、色彩も清淡で省筆を用いているので、胸のすくような清

新の気がみちみちて居り、品格ある筆端におのづから士大夫の清廉潔白な精神が溢れている。」としています。そして華山の魂の作画とも言えるべき点について「その作品に寸分弛緩したところなく、こころの締まる緊張感が感ぜられるのは、彼晩年の貧窮と讒言、迫害を蒙りつつもくじけることなき、不撓不屈の精神が醸し出したとも考えられる。それ故華山晩期の作品はいづれも卓抜な鋭気と寒水のように清冽な気が漂うていて、恰も深淵を覗ふ如き觀がある。」と書いています。

厳しい蟄居生活、不遇な環境に対して、創作意欲を燃やし、絵画の上では果敢に立ち向かっていたのです。

## 七 終わりに

今回は「蟄居中の作画と游繪図」全四ページの前記でしたが、長くなったために二分割したもので、その前半部分になります。四州真景図が晩年に着色された背景には、絵画技術の成熟と逆境に負けない充実した創作意欲がある点を改めて強調しておきたいと思えます。それでは、また。

※国宝、重文の所蔵者は、文化庁の国指定文化財等データベースによっています。

※連載中に、一度紹介した文献は紹介を省略します。

令和3年度華山・史学研究会研修視察  
愛知県内の歴史遺産をめぐる

令和3年度華山・史学研究会研修視察は、十一月二十七、二十八日、土日曜日にかけての泊二日で行われました。今回は、昨年に引き続き、コロナ禍により、県外への行程をあきらめざるを得ない状況となり、愛知県内の研修としました。

当日、午前九時、田原市博物館の駐車場に集合した会員は、加藤克己・柴田雅芳・樺山伸次・鈴木利昌・小川金一の五名で出発し、途中、会員の石川洋一が合流しました。愛知県内をめぐる今回の研修視察では、公共交通機関ではなく、レンタカーを利用します。

まず、最初の目的地は、田原市と姉妹提携している設楽町で、今年の5月に移転開館した奥三河郷土館へ向かいます。この館は、設楽町の新設された道の駅したらに併設されています。建物に隣接した駐車場は、ほぼ満車状態で、道をはさんだ向かいの駐車場から徒歩で向かうと、田口線で昭和43年まで運行されていた車両「モハ14型」が迎えてくれます。車両内にも展示がされています。奥三河郷土館には、1階に、古民家の再現展示コーナーがありました。2階の有料エリアには、奥三河の中の設楽、自然史をテーマとした設楽の森・設楽の自然と生きものたち・大地のなりたち、さらには、地元の松木



田口線モハ14型

材を使用した展示棚に考古、歴史・民俗部門が続きます。ジオラマ、設楽歴史絵巻、スクリーンに映し出される民俗芸能展示、特別展示室には、戦争中のくらしをテーマとした展示が続きます。さらに1階へ戻るギャラリーでは、約八百体の土人形も展示されていました。ここで、お昼近くなりましたので、道の駅のレストラン清嶺食堂で昼食にします。

次に、平成31年に開館した刈谷市歴史博物館へ向かいます。企画展は視察日程直前に終了していましたが、常設展示は観覧できます。博物館では、1階展示室には、お祭りひろばがあり、万燈祭の山車が展示され、万燈を担ぐ体験もできます。2階の歴史ひろばでは、刈谷の縄文時代、

刈谷藩と城下町、刈谷発の近代化をテーマにして展示を構成しています。初代藩主水野勝成時代の刈谷城と城下のジオラマ、豊田自動織機G3型などが見られます。1階に戻ると、講座室で「刈谷偉人伝」の放映も見学できました。刈谷市も田原藩とのゆかりもある市で、徳川家康の母、於大の方の実家であったり、田原藩日記のように、江戸時代の宝永七年（一七一〇）から明治時代にいたる歴史を記録した『刈谷町庄屋留帳』全二十巻が刊行されています。



刈谷市歴史博物館

次に、依佐美送信所記念館（フロリアルガーデンよさみ内）に向かいます。この記念館は、日本初のヨーロッパへの無線送信施設として昭

和四年（一九二九）当時、世界最大級の施設として設立された依佐美送信所の主要設備を展示しています。貴重な産業遺産である送信機器などの見学をすることができます。見学後、犬山へ向かい、「犬山ミヤコホテル」にチェックインしました。ホテルで、会員の大崎洋・大崎南千子と合流し、夕食に出かけます。魚民犬山西口駅前店で旅の疲れを癒します。

第二日目は、朝、国宝に指定されている犬山城を車窓から見学し、例年の視察と趣向を変え、日本を代表する多くの近代化遺産を見学できる明治村を巡ります。北口駐車場から入場します。村内は5丁目から見学していくコースにしました。最初に訪ねたのは、5丁目にある帝国ホテル中央玄関（かつては東京都千代田区、以下元あった住所地を記載）、内閣文庫（東京都千代田区）、川崎銀行本店（東京都中央区）、大明寺聖パウロ教会堂（長崎県伊王島）、聖ザビエル天主堂（京都市中京区）などを見学しました。他の施設も見られるのですが、最後に北口へ帰ってくるため、金沢監獄中央監視所・監房（金沢市）などは後から見ることにします。

4丁目では、呉服座（重要文化財、大阪府池田市）、小泉八雲避暑の家（静岡県焼津市）本郷喜之床（東京都文京区）、鉄道寮新橋工場・機械館（東京都品川区）、歩兵第六聯隊兵舎（名古屋市中区）、日本赤十字社中央病院病棟（東京都渋谷区）、ブラジル移民住宅（サンパウロ州レジストロ市）、ハワイ移民集会所（ハワイ州ヒロ市）、シアトル日系福音協会（ワシントン州シアトル

市）、第四高等学校武術道場（金沢市）、残念ながら重要文化財の宇治山田郵便局は工事中の為見学できませんでした。

3丁目では、神戸山手西洋人住居（神戸市生田区）、菅島燈台附属官舎（重要文化財、三重県鳥羽市）、品川燈台（重要文化財、東京都港区）、西園寺公望別邸「坐魚荘」（重要文化財、静岡県清水市）、幸田露伴住宅「蝸牛庵」（東京都墨田区）、北里研究所本館・医学館（東京都港区）を見学後、めん処なごや庵で昼食を取ることになりました。



明治村の展示施設の位置を確認

2丁目では、札幌電話交換局（重要文化財、札幌市大通西）、安田銀行会津支店（福島県会津

若松市）、東松家住宅（重要文化財、名古屋市中央区）、東山梨郡役所（重要文化財、山梨県山梨市）、第四高等学校物理化学教室（金沢市）、続いて、1丁目では、森鷗外・夏目漱石住宅（東京都文京区）、西郷従道邸（重要文化財、東京都目黒区）、聖ヨハネ教会堂（重要文化財、京都市下京区）、三重県庁舎（重要文化財、三重県津市）、鉄道局新橋工場（東京都品川区）、大井牛肉店（神戸市生田区）などを見学しました。帰りは、村営バスに乗りして、北口へ向かいます。百万㎡の敷地に、11件の建物と2つの産業機械（鉄道寮新橋工場内）の重要文化財を見学することができました。

コロナ禍でもあり、県外への渡辺華山に関する資料調査は叶いませんでした。この視察研修を通して、各地域に存在する有形無形の文化財や、ゆかりの人物を様々な手法で情報発信することの重要性を感じました。

渡辺華山、没後180年の昨年に、田原市民を中心に華山の波乱に満ちた後半生が、華山劇上演実行委員会の手によって上演されました。華山は蘭学研究などを通して、世界の情勢の本質を鋭く見抜き、日本の将来のあるべき姿を見据えていたと思います。華山の考え方や行動には、現代に通じるものがあります。グローバル化と情報化が進む現代、演劇という手法が、世界や日本を考えるきっかけと成り得るか、情報発信の在り方を考えながら、博物館駐車場で解散しました。

研究会員 小川金一

**田原市博物館展覧会のご案内**

十月八日(土)～十一月二十七日(日)

**企画展**

海から広がる渥美半島展

(企画展示室1・2)

三方を海に囲まれた渥美半島に生きた人々は、海の恵みを生かした生活や交易の多くは海を通して行ってきました。縄文時代から現代に至る、我々と海との関わりの歴史を見たいきます。

【企画展イベント】「海の学び」をテーマに、子どもを対象とした展示を行います。詳細はホームページ等でご覧ください。

・十月十日(月・祝)縄文まつり

・十月八日(土)・十一月三日(木・祝)ギャラリートーク



江戸時代から昭和30年ごろまで田原の町の玄関口であった田原港(船倉湊) 昭和10年頃 鈴木政一氏撮影

四月十六日(土)～五月二十二日(日)

**テーマ展**

ふるさとの歴史「水と海」

(企画展示室1)

※ふるさとの歴史展では、渥美半島の歴史を、文化・産業・できごとなどいくつかのテーマから紹介します。

田原の美術「花を描く」

(企画展示室2)

五月二十八日(土)～七月三日(日)

**テーマ展**

ふるさとの歴史「文化と偉人たち」

生誕一五〇年「岡田虎二郎」

(企画展示室1・2)

七月九日(土)～八月二十一日(日)

**テーマ展**

館蔵 屏風展

(企画展示室1・2)

現在では中々見られなくなった屏風。田原市博物館が所蔵する華山や弟子たちが描いた作品をはじめ、博物館所蔵の迫力ある屏風の数々をご覧に入れます。



市指定文化財 渡辺華山筆「商山四皓」 天保年間

八月二十七日(土)～十月二日(日)

**テーマ展**

ふるさとの歴史「近現代の渥美半島」

(企画展示室1)

骨董を愉しむ(企画展示室2)

【渡辺華山の生涯と作品】

常設展示室では、渡辺華山の生涯を常時紹介しています。

また、特別展示室では、華山やその師友、弟子等の作品を随時入替えを行いながら展示しています。



重要文化財 渡辺華山筆「千山万水図」 天保一二年(一八四二)年

**観覧料**

企画展 海から広がる渥美半島展 開催時

一般 四〇〇円(三二〇円)  
小中生 二〇〇円(一六〇円)  
その他 三二〇円(二四〇円)  
小中生 一五〇円(一二〇円)

(一)内は二十人以上の団体料金  
東三河在住の小中学生は、ほの国子どもパスポート提示で無料。  
休館日 毎週月曜日(祝日の場合はその翌平日)、展示替日

(公財)華山会から

講座「渡辺華山を知るために」

毎月十一日午前九時から

華山・史学研究会会員募集中

毎月第四土曜日研究会

視察研修(年一回)に参加できます。

渡辺華山史学巡りガイド養成講座

毎月一回程度

申込場所 華山会館事務室

華山会報 第四十八号

令和四年四月十一日発行

編集発行 公益財団法人華山会

理事長 鈴木 愿

常務理事 林 勇夫

事務局長 大根義久

〒四四一―三四二一

愛知県田原市田原町巴江二二の一

TEL〇五三一・二二・一七〇〇

FAX〇五三一・二二・一七〇一

編集協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 小林一弘

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。次回発行予定 令和四年十一月十一日